

立川女子高等学校 教員推薦図書 2023



※ホームページ掲載にあたり、教員氏名はイニシャル表記に変更しています

も く じ

校長・教頭・副教頭先生	・・・ p.3～5
国語科の先生	・・・ p.5～11
英語科の先生	・・・ p.11～15
地歴公民科の先生	・・・ p.16～23
数学科の先生	・・・ p.23～24
理科の先生	・・・ p.25～26
家庭科の先生	・・・ p.27～29
保健体育科の先生	・・・ p.29～31
芸術科の先生	・・・ p.31～32
司書の先生	・・・ p.32～33

今年も、先生方にオススメの本を紹介していただきました。

普段は自分の好きな本を読んでいる皆さんに、いつもとは違ったジャンルの本を読んで欲しいという思いで毎年作成しています。

立川女子高校の皆さんなら読めると思う本を選んでいきますので、ぜひいろいろな本を手にとってみてください。



【K・T校長先生(地歴公民科)推薦】

『わたしを離さないで』

カズオ・イシグロ 著

早川書房 刊

最初読み始めていくと、外国のどこかの施設の青春物語かなと思いきや、なんだか話しが変な雰囲気になっていきます。ドキドキして読み進めると「臓器提供」がキーワードになってきます。私達って他の人達と何が違うの？その疑問を追いかけていきます。SFなんだけど、すごく身近でリアリティーを感じます。「生きるってなに」を不思議な感覚で考えさせられます。最後まで読み終えたとき、みなさんは何を感じるのでしょうか。



【Y・T教頭先生(地歴公民科)推薦】

『夜と霧』

ヴィクトール・E・フランクル著

みすず書房 刊

ナチスドイツの強制収容所を奇跡的に生きのびた心理学者の記録です。どんな状況下であっても「希望を見出す力」がいかに大切か、この本を通して思い知ることになります。3年にも及んだコロナ禍、そしてロシア・ウクライナ情勢といったの時代も不安定さがつきまといます。生きていく上で苦しみのレベルはそれぞれですが、極限を生き抜いた筆者の言葉は現代を照らす光のように感じました。



【T・S副教頭先生(国語科)推薦】

『おとなになるってどんなこと？』

吉本ばなな 著

筑摩書房 刊

「私がおとなになった瞬間です」の一文を読んで、「私が大人になった瞬間」はいつだろう？！と、ついつい考え込んでしまいました。どんな大人にも大人になる瞬間があって、どんな大人でも子供を経験して今があります。そして自立するために様々な困難を乗り越えて、今、大人として生きているのかな。近い将来大人になるみなさん、どうやって大人が大人になっていくのか知りたくありませんか？



【T・S副教頭先生(国語科)推薦】

『女子のための「手に職」図鑑』

華井由利奈 著

光文社 刊

さあ、大人になるためには自分の近い将来を見据えて進路を考えなければなりません。今では働く女性が増えています、みなさんは正社員として働きたい？パートとして働きたい？それとも専業主婦？世の中には自分が知っている数の何百倍もの職業があります。小さな選択とならないように、そして人生100年をどう生きるかは是非考えていきましょう。



【T・S副教頭先生(国語科)推薦】

『モヤモヤそうだんクリニック』

池谷裕二 著

NHK出版 刊

この本によると「学校という場所は、モヤモヤしたことであふれている社会に適応していく力をつける場所」みたいです。これから皆さんが出ていく社会にはモヤモヤしたことがあふれているようです。そんな社会で生きて行くために、高校生のうちからモヤモヤをなくしておけるといいなあと思い、推薦しました。

(どうしたら記憶力が良くなるの、学校のルールに納得できない、僕のやる気スイッチはどこ等々のモヤモヤが解消されるかも？！)



【T・S副教頭先生(国語科)推薦】

『女の子はどう生きるか』

上野千鶴子 著

岩波書店 刊

大人の私が読んでも勉強になりました。改めて世の中のことを考えさせられます。大人の階段絶賛駆け上り中JKの皆さんにとって身近な話もあれば、大人になる前にちゃんと知っておかなければいけないことが詰まっている本です。自分がどう生きていけばいいのか是非考えて欲しいなと思います。あなたはどうかどう生きていますか。



【T・S副教頭先生(国語科)推薦】

『自分で「始めた」女たち』

グレース・ボニー 著

海と月社 刊

世の中には自分が知っている数の何百倍もの職業があると「手に職」図鑑の紹介で書きました。今度は世界で自分の力を発揮している女性が100人以上も紹介されている本です。単純にかっこいい。それぞれの人の子供の頃の夢や価値観、モットー、不安・悩み色々な気持ちが書かれています。人生簡単な毎日ではないけれど、努力すれば必ず輝ける、そう思える本です。皆にも輝く女性になって欲しいし、絶対に輝ける！と自信を持ってほしいな、と思いながら紹介します。皆さんがこの人かっこいい！と思える人が見つかるといいなあ。



【O・M先生(国語科)推薦】

『汝、星のごとく』

凧良ゆう 著

講談社 刊

「自分で自分を養える、それは人が生きていく上での最低限の武器です。(中略)独身だろうが結婚していようが、その準備があるかないかで人生がちがってきます」という言葉に納得。人間関係の重い内容の本かもしれないが、どのような状況においても、人にどう思われるかより、自分がどう生きるべきなのかを考えねばならないことを教えられた作品。



【O・M先生(国語科)推薦】

『神さまのいうとおり』

谷瑞恵 著

幻冬舎 刊

「ハサミさん、ハサミさん……」と言いながら、物を探して見つけた経験ありませんか？このような非科学的な事、信じられないと思いつつも、ちょっと信じてしまう私は、この本を読んで、そういえば、幼い頃、こんな事言われたなあと思い出し懐かしくなりました。主人公の女子高校生が、昔の人が言っていたこと、やっていたことの意味を知り、素直になっていくのがとても爽やかでお勧めです。



【O・M先生(国語科)推薦】

『虹の音色が聞こえたら』

関口尚 著

集英社 刊

沖縄の楽器、三線と出会った少年が、三線に導かれるように、理不尽な現実を前向きに生きていこうとする話。負のループから抜け出す為には人との出会いがきっかけであった。人と出会うことで、自分自身が変わっていただけることを実感する一冊。



【K・N先生(国語科)推薦】

『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』

万城目学 著

KADOKAWA 刊

かのこちゃんは小学1年生の元気な女の子。ある時突然「知恵が啓け」て以来、いろんなことに興味津々の毎日です。マドレーヌ夫人は、雷雨の日にかのこちゃんちに迷い込んだ赤トラのメス猫で、同じくかのこちゃんちで暮らす源三郎(犬)の妻です。かのこちゃんはこの二匹が夫婦であることに気が付いて、二匹が長く一緒にいられるように心を尽くします。しかし、マドレーヌ夫人と老犬・源三郎との間には悲しい別れが迫っていました。そして、かのこちゃんもまた、「ふんけーの友」との別れを通じて、一つ大人になっていきます。少し不思議で、心があたたかくなる一冊です。



【O・S先生(国語科)推薦】

『成瀬は天下を取っていく』

宮島未奈 著

新潮社 刊

今、ワクワクするようなことはありますか。全力で楽しんでいることはありますか。

この本は周りの目を気にしないで全力で楽しむ女の子たちのお話です。読み終わった時にはきっとあなたも楽しいことに挑戦したくなっていると思います。



【O・S先生(国語科)推薦】

『無限の中心で』

まはら三桃 著

講談社 刊

主人公は数学が苦手な女子高生です。しかし新聞部の友人に頼まれて、数学オリンピックに挑戦する数学研究部を取材することになります。数学研究部の部員はとても人間味があって個性豊かな人たちです。登場人物が魅力的で、読み終えてからもその人たちのその後が気になってしまいます。



【O・S先生(国語科)推薦】

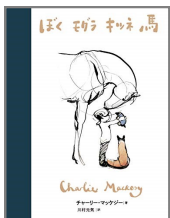
『品格のある女性はスカート丈が美しい』

横田真由子 著

大和出版 刊

「自分のスカート丈を知っているということは、自分をよく知っているということ。つまり、『スカート丈は、身の丈』ではないかと感じます。」という一文を見て読もうと思いました。ただ単にスカート丈を長くしなさいと言っている本ではありません。身の丈を知っている人は、「他者目線」も持っていて、「他者から自分がどう見えているか」を想像することができるそうです。

オシャレすることが好きな人に読んでもらいたい本です。



【K・M先生(国語科)推薦】

『ぼく モグラ キツネ 馬』

チャーリー・マッケジー 著

飛鳥新社 刊

心に余裕がなくなった時に小さな余白を作ってくれるような作品。そして、苦しくなってる人に贈りたいと思う作品です。



【K・M先生(国語科)推薦】

『カレーライス 教室で出会った重松清』

重松清 著

新潮社 刊

皆さんも小学校の教室で出会ったでしょうか。優しいけれど子どもに都合良く進むのではなく、厳しいことに直面しているからこそ見えてくる優しさに光を当てた作品。心にグッとくるものがあります。



【K・M先生(国語科)推薦】

『日本語の古典』

山口仲美 著

岩波書店 刊

奈良時代の『古事記』から江戸末期の『春色梅児誉美』まで、歴代の名作30作品を取り上げて、言葉と表現を切り口にその面白さを説明しています。なぜ古典を学ぶのか、その問いの答えがここにあります。



【Y・T先生(国語科)推薦】

『向田邦子ベスト・エッセイ』

向田和子 編

筑摩書房 刊

昭和の頃、テレビドラマが最高の娯楽でもあった時代がありました。その作品の多くが、家族をテーマにしたものだったりしました。そんなお茶の間ドラマの手がけたのが、この向田さん。脚本家として、数々のヒットドラマを生み出しました。彼女がつづるエッセイは、これがまたエッセイのお手本のよう。そして、ここでも昭和の時代の家族像が描かれています。家族って、実はドラマ以上にドラマチックなのかもしれませんね。



【Y・T先生(国語科)推薦】

『伊勢物語 ビギナーズ・クラシックス』

坂口由美子 編

KADOKAWA 刊

古典作品って、教科書の中にあるだけのものではありません。一冊の本という形で読んでみてはどうでしょう。確かに、古文の長い文章を読むのは、少ししんどい。ならば、現代語訳を中心に読んでみてはどうでしょう。案外、すんなりと読めてしまうものですよ。本シリーズは、現代語訳がメインの、初心者向けの古典作品シリーズです。教科書にもある『伊勢物語』。現代語訳で一冊を通して読んでみると、主人公の生涯が描かれていることを実感できます。



【F・K先生(国語科)推薦】

『思考の整理学』

外山滋比古 著

筑摩書房 刊

1年生は高校生活への期待を。2年生は進路への迷いを。3年生は将来への努力を。

いずれにせよ主語は常に「You」ではなく「I」です。向き合うのは「自分」。先生が自分と向き合いたい時に読むのがこの本です。増やすことよりも捨てることが大切という考え方は先生の生き方になっています。



【F・K先生(国語科)推薦】

『名探偵のままでいて』

小西マサテル 著

宝島社 刊

「2023年このミステリーがすごい！」大賞受賞作品です。認知症で介護を受けながら生活していた71歳の祖父。ミステリを愛する祖父に、孫娘の「楓（かえで）」は身の回りで起きた不思議な謎を話す。すると祖父は探偵のようにその謎を解き明かしていく…といった物語です。表紙もそうですが優しい雰囲気 に 溢れた1冊です。



【F・K先生(国語科)推薦】

『赤ヘル1975』

重松清 著

講談社 刊

1945年8月6日。原爆が落とされ、焼け野原になった日本。それから数十年後の広島が舞台になっているお話です。最近ではG7サミットが開催されたことでも注目されましたね。歴史という知識をもっている、背景を知る機会は少ないと思います。読んでいる間は広島に住んでいる感覚になれるので、ぜひ読んでみてください。



【M・I先生(国語科)推薦】

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？ 身近な疑問からはじめる会計学』

山田真哉 著

光文社 刊

「た～けや～さおだけ～♪」というリズム、聞いたことはありませんか？(もしや最近では聞かなくなってしまったのでしょうか…?)

昔からずっとあるあの「さおだけ屋」は儲かっているのでしょうか？儲かっていないとしたらなぜ昔からずっと続けられるのでしょうか？気になるけど、誰に聞いたらいいかわからないお金に関する疑問を、身近なところから考えていく本です。



【M・I先生(国語科)推薦】

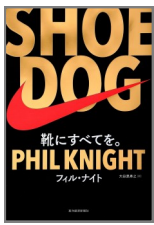
『勉強が面白くなる瞬間 読んだらすぐ勉強したくなる究極の勉強法』

パク・ソンヒョク 著

ダイヤモンド社 刊

「なぜ勉強しなければならないのか」――。そう考えたことがある人、もしくはその悩みを今まさに抱えている人は多いのではないのでしょうか。この本はその答えを与えてくれる、いや、そもそもその悩みを根っこから覆してくれる、そんな本です。

受験大国と言われる韓国で45万部のベストセラーを記録し、読んだ学生の9割以上が「勉強したくなった」と答えた名著。この本を読み終えた後、あなたは必ず勉強したくなる――。



【A・K先生(国語科)推薦】

『SHOE DOG 靴にすべてを。』

フィル・ナイト 著

東洋経済新報社 刊

20歳かそこいらの頃、経営理念を見直すきっかけになった1冊。

父親から借りた50ドルを元手に、アディダスやプーマを超える売上げ300億ドルの会社「ナイキ」を創り上げた男の物語。ビジネスと人生のすべてが、自分自身の歩んだ道が、赤裸々に語られている。

読み返して感じた。私は今もバットフェイス（ダメ男）だろうか。私はこれからもバットフェイスでいられるのだろうか。読めば「気づき」があるはず。



【K・K先生(英語科)推薦】

『現代語訳 学問のすすめ』

福沢諭吉 著、齋藤孝 訳

筑摩書房 刊

聞いたことはあるけれど、読んだことはない人に。あるいは、すでに読んだことがある人にも、もう一度。くり返し読んでも学ぶことがあるし、令和になった今でも通じることがあるはず。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」とはどういうことか。学問、おすすめです。



【K・K先生(英語科)推薦】

『英語にあきたら多言語を！ ポリグロットの真実』

トニー・ラスロ 著

アルク 刊

言葉を使って生活しているわたしたちは、これからも新しい言葉と出会い続けることでしょう。外国語もしかり、語学学習の工夫やヒントは身近な日常の中にあるのかも。

—「言葉」を愛せば、学習はもっと楽しい。—
著者からのメッセージです。



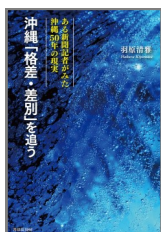
【K・K先生(英語科)推薦】

『社会に出るあなたに伝えたい なぜ、読解力が必要なのか?』

池上彰 著

講談社 刊

読解力とはどのような力のことでしょうか。読み解く力のこと?国語や英語の授業に限らず、普段から生活の中でも役に立つ力ですよね。わからないことを解きほぐすためにも高めたい力。この本によると、読解力はいつでもどこでも伸ばすことができ、伸ばすと生き方が変わるとあります。楽しく読解力を上げるにはどうすればよいのか?その答えは・・・やっぱり読書!とのこと。まずは一冊、推薦図書を手にとろう。



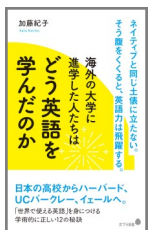
【K・K先生(英語科)推薦】

『沖縄「格差・差別」を追う』

羽原清雅 著

書肆侃侃房 刊

この本は、様々な視点から見た沖縄の歴史が記載されています。単なる歴史が書かれているだけではなく、著者が元新聞記者であるため、政治的な面からみた沖縄についてや戦争時の新聞記者による記録も記載されており、戦争の悲惨が伝わる内容になっています。難しい部分もありますが、修学旅行に行く前には一度は読んでほしい本です。



【O・Y先生(英語科)推薦】

『海外の大学に進学した人たちはどう英語を学んだのか』

加藤紀子 著

ポプラ社 刊

幼少期の海外経験や特別な英才教育を受けたわけではないが、日本の普通の高校に通いながら努力の末に海外の大学への進学を実現した人たちの体験談を読むことができます。費用を抑えて進学する方法もあるようです。学習方法については、学校の教材をさまざまな練習法で使い倒すことでも英語の基礎体力を身につけることができる、など海外の大学への進学を考えていなくても参考になる部分があると思います。



【T・Y先生(英語科)推薦】

『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ』

ブレイディみかこ 著

文藝春秋 刊

エンパシーとは「他者の感情を理解する能力」のことだそうです。近しい人には「共感」できても、少し離れた「他者」への「理解」はなんと難しいことか。コロナ禍などの社会問題だけでなく、個人の持つ偏見など、様々な視点から他者と自分を見つめることができる本だと思います。



【T・Y先生(英語科)推薦】

『喜嶋先生の静かな世界』

森博嗣 著

講談社 刊

森博嗣さんの自伝的小説。「研究者」は、純粹に大好きな研究に没頭できるものなのでしょうか。学部を卒業し、大学院に進み、助手、助教、準教授、教授…進めば進むほど研究ができると思えば、だんだんと「現実問題」との狭間で苦悩する。特に理系大学に進みたい人に読んでもらいたい一冊です。



【O・D先生(英語科)推薦】

『だから、あなたも生きぬいて』

太平光代 著

講談社 刊

人生のどん底を経験をしながらも、希望をもって必死に生きていく軌跡が描かれている。ひとりぼっちではないというメッセージが響き、生きていくなかでのヒントを得られる一冊です。



【H・S先生(英語科)推薦】

『ヒトは「いじめ」をやめられない』

中野信子 著

小学館 刊

「いじめ」は決して中高生の世界にだけあるのではなく、大人の世界でも起きています。「いじめ」という言葉を使わないだけです。人間の社会に生きている限り、「いじめ」にいつ出会ってしまうかわかりません。そもそも「いじめ」は自然に起きてしまうものなのか、人が意識的にするものなのか、どちらだと思いますか？どうすれば社会から「いじめ」だけを取り除くことができるでしょう。一緒に考えてみませんか。



【H・S先生(英語科)推薦】

『ミッキーマウスの憂鬱』

松岡圭祐 著

新潮社 刊

ふと思い出したので紹介します。誰もが知っているテーマパークの裏方として働く主人公のお話。来場者に夢をみせるための裏方の苦悩・努力・プライドなどが、読んでいてひしひしと伝わってきます。作者は本当に働いていたのかも…。何事においても、始めてから見えてくる景色ってありますよね。続編が2021年に出ていますので、読んでみてハマったらそちらも読んでみてください。



【Y・M先生(英語科)推薦】

『二セ姉妹』

山崎ナオコーラ 著

中央公論新社 刊

お笑い芸人の阿佐ヶ谷姉妹を知っていますか。”姉妹”として活動していますが、実際は本当の姉妹ではありません。彼女たちはお工作中だけでなく、私生活でも姉妹同然の暮らしをしています。今回紹介するこの物語の本編に阿佐ヶ谷姉妹は登場しませんが、血の繋がりがなくても親子になったり、パートナーになったりと多様化する家族のかたちがテーマになっています。ぜひ読んでみてください。



【S・Y先生(英語科)推薦】

『掬えば手には』

瀬尾まいこ 著

講談社 刊

皆さんは学校の中でたくさんの人と出会い、そしてたくさんのお話をして生活していくと思います。もし目の前の人困っているとき、皆さんは手を差し伸べてあげることはできますか。そんなとき、どんな言葉を投げかけることができますか。『掬えば手には』は、「自分自身に取り柄がない」ことに悩む主人公の日々の物語ではありますが、人との接し方について考えさせられる優しい物語です。



【N・N先生(英語科)推薦】

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』

伊藤亜紗 著

光文社 刊

目の見えない人はどうやって視覚以外の感覚を使って生きているのか、不思議に思ったことはないでしょうか。見えている人と見えていない人の違いは、いわば4本脚の椅子でバランスをとるか、もともと3本脚の椅子でバランスをとるかということだそうです。こんなふうに、いままでなんとなく感じていたことが輪郭をもって伝わってくる本です。著者のものの見方と、的確に言語化する能力が素晴らしいです。



【N・N先生(英語科)推薦】

『喜ばれる人になりなさい』

永松茂久 著

すばる舎 刊

毎日一生懸命頑張っていると、何のために頑張っているのかを見失いそうになることがあります。そんなときにこれを読むと、私たちの才能や能力、地位は人のためにある、ということに気づかせてくれて、じわじわと心が潤います。何のために頑張ればよいかわからないという人は一読の価値ありです。この本では、家族と過ごした時間が流れるように書かれていきます。当たり前の日常を思い出させてくれて、家族を大切にしたいくなる本でもあります。



【T・Y先生(地歴公民科)推薦】

『彼女の家計簿』

原田ひ香 著

光文社 刊

主人公の里里は、母から送られた祖母の家計簿を通して祖母の生き方を知ります。現代であっても女性が社会で活躍するには様々な壁があると言われますが、昔の女性たちはもっと困難な状況の中で生きていました。少しミステリアスな面もあって読みやすく、またジェンダーについて考えるきっかけにもなると思います。



【T・Y先生(地歴公民科)推薦】

『下品大全』

菅原圭 著

河出書房新社 刊

本来は社会人向けのマナー本ですが、高校生から身につけておきたいことが数多くあります。自分の行動を見直すことはもちろんのこと、もしかしたら無意識にやっていた自分の振る舞いに気付いて、「私って・・・!？」と恥ずかしくなるかもしれません。でも著者が本当に伝えたかったことは1つ1つの振る舞いだけでなく、それらの先にあるもっとも大きな目線での下品な行動。これから大人になるみなさんに読んで頂きたいです。



【S・J先生(地歴公民科)推薦】

『正義を振りかざす「極端な人」の正体』

山口真一 著

光文社 刊

SNSでの誹謗中傷、コロナ禍での自粛警察や過剰なクレームなど自分の正義を疑わず相手を傷つける人（本人は傷つけているとは全く思っていない）がいます。また、ごく少数なのに「声が大きい（強い）」がために、その意見が大勢を占めるかのようには世間は誤解しがちです。統計学を専門とする筆者が調査・分析し、正義を語る「極端な人」の正体と社会の問題についてメスを入れていきます。メディアリテラシー、特に情報を受け取る側のリテラシーの内容となります。ネットニュースやコメント欄をよく読むという人は、情報の見え方が変わるかもしれません。



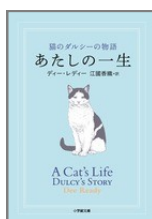
【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『日本の憲法 最初の話』

白井明大 著

KADOKAWA 刊

日本国憲法について、前文や授業で紹介された条文以外にどんなことが書かれているかは知らない、という人も少なからずいるでしょう。憲法は国の柱です。戦後の復興のなかで、どのような国を望んだのか、それを知るために日本国憲法を読んでみてほしいと思います。とはいえ原文を読んでも分からないかと思う人は、ぜひこの本を手にとってみてください。詩の形で分かりやすく憲法や法律、国際法などが記されています。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『あたしの一生 猫のダルシーの物語』

ディー・レディー 著

小学館 刊

私は犬も猫も大好きですが、悲しいかな、なぜか猫にはものすごく嫌われます。特にこの高松町界隈の猫の間では危険人物扱いされているようです。遊んでくれる猫はごくわずかで、猫との生活は夢のまた夢です。この物語は、猫の視点から描かれた作品です。猫の気持ちを知りたい人はぜひ。ちなみに私は猫アレルギーです。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『さいごの毛布』

近藤史恵 著

KADOKAWA 刊

猫の本を紹介したので犬の本も。人付き合いが苦手な主人公の智美が友人の紹介で働くことになったのは、年老いた犬の最期を看取る「老犬ホーム」。犬たちはそれぞれに、飼い主のもとで最期を迎えられない理由を抱えています。ホームでのさまざまな出来事を通し、自分自身や家族に向き合い、成長していこうとする女性の物語です。人付き合いがあまり得意ではない私は、この本を読んで勇気づけられました。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『ベルリン 東ドイツをたどる旅』

見市知 著

産業編集センター 刊

私が子どもの頃は、ドイツは東西に分かれていました。当時は「そういうものだ」と思っていました。ベルリンの壁が崩壊してドイツが統一されたとき、かなりの衝撃を受けたことを今でも覚えています。世界史を学んで以降、東ドイツのシュタージの存在や壁の崩壊の経緯を知って、なんて歴史的に興味深い地域なんだろうと感動しました。いま、ますます東ドイツの歴史に心惹かれています。観光案内的な部分もあるので楽しく学べますよ。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『ラノベ古事記』

小野寺優 著

KADOKAWA 刊

タイトル通り、日本の神話である『古事記』をライトノベル風にした本です。日本の神様って、人間味があって本当に面白いんですよ。私の推しは「オオクニヌシノミコト」です。大好きです。ちなみに、オオクニヌシも私のことが大好きです。相思相愛です。どんな神様かは……読んでみてのお楽しみ。歴史書なんてつまらないという思い込みを捨て、騙されたと思って読んでみてください。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『神様の御用人』全11巻

浅葉なつ 著

KADOKAWA 刊

言わずと知れた名作！ジャンルとしてはライトノベルですが、その域をはるかに超える作品の一つです。全10巻ありますが、最終巻を読み終えたあとは、充実感と寂寥感にさいなまれたものです。ところが最近番外編が出版され、コラボイベントも開催され、幸せな気持ちになりました。狐好きな私にはたまらない作品ですが、話が進むにつれていろいろな動物や神様が大活躍！私も御用人になりたいです。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『大人の学参 まるわかり近現代史』

津野田興一 著

文藝春秋 刊

大学入試の論述問題を切り口として、近現代の世界史の5つのテーマについて考察を深めていく本です。地図や史料なども豊富に使用されていて、問いは一見すると難しいのですがサクサク読めます。世界史を通して「知識がつながる」という経験をしたい人におすすめです。ちなみに著者は立川高校の先生だそうです。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『相思樹の歌』

西園徹彦 著

左右社 刊

元ひめゆり学徒隊の人びとなどの間で歌い継がれている歌があることを知っていますか？それが「相思樹の歌―別れの曲―」です。沖縄戦とその歌の成立に関する史実に基づき、紡がれた物語です。沖縄戦の記述はもちろんですが、戦後の物語にこそ作者の思いが込められているような気がします。これから修学旅行に行く2年生、昨年度ひめゆり平和祈念資料館で学んだ3年生、音楽や詩に関心のある人におすすめです。



【S・M先生(地歴公民科)推薦】

『少女たちがみつめた長崎』

渡辺考 著

書肆侃侃房 刊

本書は、「女性と原爆」というテーマに取り組んだ長崎西高校放送部の生徒たちを追った記録です。みなさんと同じ年代の高校生たちが、みなさんより少し若くして兵器工場に動員されていた女生徒たちの原爆体験をどのように受け止めたのか。原爆は少女たちに何をもたらしたのか。難しいことですが、高校生には分からない、なんてことはありません。「戦後」がずっと続くことを願ってやみません。



【N・N先生(地歴公民科)推薦】

『今日は、お日柄もよく』

原田マハ 著

徳間書店 刊

「困難に向かい合ったとき、もうだめだ、と思ったとき、想像してみるといい。三時間後の君、涙は止まっている。二十四時間後の君、涙は乾いている。二日後の君、顔を上げている。三日後の君、歩き出している。」

生きていれば、しんどい時や辛い時が訪れます。それでも前向きで居続けることってかなりエネルギーを使うものです。そんな時にこの一文に出会い、自分自身の心がふっと軽くなりました。言葉の力は、すごいです。



【N・N先生(地歴公民科)推薦】

『旅屋おかえり』

原田マハ 著

集英社 刊

誰かの代わりに「旅」をする。自らのミスで全ての仕事を失った、売れない芸能人「丘えりか」が取った最終手段が「旅の代行」という聞いたこともないお仕事。旅に行きたくてもいけない。それでも想いはとどけたい。そんな人と人のご縁を結びに、今日もどこかで彼女は旅をしていることでしょう。新型コロナウイルスの影響で、思うように旅に出かけられなかった中、この本を読んだら旅情を余計掻き立てられました。かえって逆効果！



【N・N先生(地歴公民科)推薦】

『会話を哲学する コミュニケーションとマニピュレーション』

三木那由他 著

光文社 刊

入試広報部の主任として、人前で話す場面が多くなる中、以前よりも「会話」や「言葉」を気に掛けるようになったように思います。それでも、「あれは言い過ぎだったかなあ」と思うことはまだまだありますが。

私たちの普段の何気ない「会話」は、そもそもどういうものなのか、漫画や小説などを題材にその魅力を解説していきます。人間である私たちにしかできない「会話」は、とても奥が深いものです。



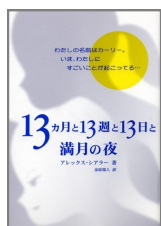
【N・N先生(地歴公民科)推薦】

『栗山ノート』

栗山英樹 著

光文社 刊

「憧れるのを、辞めましょう」決勝での大谷選手の言葉、カッコよかったですよ。その大谷選手の師匠ともいえる、侍ジャパンを率いた栗山監督は、どんな思いで組織を率いていたのかが、この本には書かれています。WBCで選手のことを信じ抜き、寄り添いながらベストパフォーマンスを引き出す。その背景はおそらくシンプルで、「相手のために自分ができる最大限の仕事をする」ことなのだと思います。



【K・Y先生(地歴公民科)推薦】

『13か月と13週と13日と満月の夜』

アレックス・シアラー 著

求龍堂 刊

主人公カーリーは、「魔女に身体を奪われた」というおばあさんと出会います。おばあさんの本来の身体を取り戻すため、カーリーは奮闘しますが…ここから先は読んでからのお楽しみです！本のカバーはとっても可愛いですが、中身はちょっと怖いかも…？ハラハラ、ドキドキが好きな人はぜひ読んでみてください。



【K・Y先生(地歴公民科)推薦】

『ラグリマが聞こえる ギターよひびけ、ヒロシマの空に』

ささぐちともこ 著

汐文社 刊

「ラグリマ」とは、クラシックギターの有名な曲の一つで、スペイン語で「涙」という意味があります。広島市に住む美音(みおん)は、近所の古い洋館にいる「怪人」のようなおじさんと出会い交流する中で、広島の歴史や戦争について学んでいきます。今年は終戦から78年。物語と優しいギターの音色を通して、平和や戦争の愚かさについて考える夏にしてみたいかがででしょうか。



【K・Y先生(地歴公民科)推薦】

『オンリー・ミー 私だけを』

三谷幸喜 著

幻冬舎 刊

皆さんは昨年度の大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」を見ていましたか？大河ドラマではありますがクスツと笑える要素があり、楽しみながら歴史を学ぶことが出来たのではないのでしょうか。この本は、「鎌倉殿の十三人」の脚本を手掛けた三谷幸喜さんのエッセイです。三谷さんの日常には面白いことがたくさんおきます。何気ない毎日の中に、「楽しい」と思えることを見つけるのが上手くなりそうな一冊です。



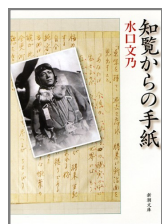
【K・H先生(地歴公民科)推薦】

『勉強する気はなぜ起こらないのか』

外山美樹 著

筑摩書房 刊

やる気になっていたのに、「勉強しなさい！」と言われると、途端にやる気なくなってくる。やらなきゃいけないのはわかっているけど、やる気が出てこない。みなさんにも、そんな経験があるのではないのでしょうか。学生時代はもちろん、社会に出てからも勉強は続きます。やる気をコントロールするコツを心理学の視点から考えてみませんか？



【T・Y先生(地歴公民科)推薦】

『知覧からの手紙』

水口文乃 著

新潮社 刊

戦争により、結婚式の直前に出撃命令を受けた特攻隊の穴沢利夫さんは、婚約者であった伊達智恵子さんへ遺書を残しました。自分のことは忘れて強く生きるようにと諭しながらも、最後には「智恵子 会いたい、話したい、無性に」と強烈な未練を残して、空へ旅立ちました。

それから62年後、婚約者の想いが語りつくされたノンフィクションです。



【T・Y先生(地歴公民科)推薦】

『野心のすすめ』

林真理子 著

講談社 刊

「私なんて何の取り柄のない人間だ…」そんな風に自分に自信を持ってない人にこそ、読んでもらいたい本です。慰め励ましてくれる本ではなく、尻を叩いてくれる清々しい本です。

また第四章では、作者が考える女性が働くべき理由が語られており、個人的に何度も読み返している部分です。「自立した女性」とはなにか、そして自分の幸せはどこにあるのか、この本を読んで一緒に考えていきませんか？



【E・Y先生(数学科)推薦】

『君のクイズ』

小川哲 著

朝日新聞出版 刊

賞金1000万円が懸かったクイズ大会で、あと一問正解すると優勝という場面から始まります。そして、最後の一問が読まれる前に、対戦者・本庄絆が正解します。負けた主人公・三島玲央は、本庄絆はヤラセをやっていたのか調べていきます。クイズ大会に出場する人の考え方、正解へ導く方法が論理的にわかりやすく書かれています。本庄絆はどのようにして問題が読まれる前に正解へたどり着いたのか、気になる方は是非読んでみて下さい。



【E・Y先生(数学科)推薦】

『映画を早送りで見ると人々』

稲田豊史 著

光文社 刊

みなさんは映画や動画を倍速で観ますか。最近、タイパ（タイムパフォーマンス）を重要視する人が増えてきています。この本はそんな人たちを非難する本ではなく、なぜそうなったのか考察しています。そして、この現象をきっかけに現代の問題点を様々な面から示唆しています。社会に興味がある人は読んでみましょう。この現象が改善されるかはわかりませんが、理解はできます。



【N・H先生(数学科)推薦】

『運転者 未来を変える過去からの使者』

喜多川泰 著

ディスカヴァー・トゥエンティワン 刊

嫌なことがあると「どうして自分だけこんな目にあわなければいけないのか」と嘆くことは、誰にでもあります。プラス思考になればとは言われども、そんな簡単に捉えられたら苦労しませんよね。

この本は、ついていない40代半ばの男性が、ちょっと変わったタクシーに乗車したことで人生の転機を迎えるというお話です。偶然発見した一冊ではありましたが、自分の人生観を変える、とてもいい出会いをしたと思います。



【N・H先生(数学科)推薦】

『ふたりのイーダ』

松谷みよ子 著

講談社 刊

昨年公開された映画『すずめの戸締まり』予告映像において「歩く椅子」を見た時、私が真っ先に思い浮かんだ作品がこのお話でした。幼少期に一度だけ朗読番組で聴いた内容を強く覚えているくらいには、印象に残っています。

この本は、田舎の祖父母の家に預けられた兄妹が、古い洋館と不思議な椅子に出会うお話です。不気味で物悲しい作品ではありますが、一度触れてみることをおすすめします。



【S・A先生(数学科)推薦】

『時をかけるゆとり』

朝井リョウ 著

文藝春秋 刊

皆さんは「学生のうちにこれはしておけ」という大人からの助言を聞いた覚えはありませんか？勉強しておけ、留学しておけ、読書しておけ、勿論皆さんより長く生きた大人達の助言ですから、間違いはないでしょう。では逆に「やらなくてもいい」ことはなんのでしょうか？この本はエッセイ形式で、作者の学生時代の無茶無謀を面白おかしく語る、そんな作品です。学生時代やらなくてもいいことを知りたければ、是非読んでみてくださいね。



【M・S先生(理科)推薦】

『ぼくたちは習慣で、できている。』

佐々木典士 著

ワニブックス 刊

普段私たちが日常的に行なっている行動は、自身の『意識』によるものだと思っていないですか？

例えば朝起きたとき歯を磨きますよね。それは私たちが「歯を磨く！」と意識することで起っていると、考えられがちです。実はそうではないのです！意識よりも先行するものがあります。この本は、読み込むほど「あの場合は？」「この場合は？」と、疑問が水の沸騰時の水蒸気ほど出てきます。興味のある方は、是非。



【K・K先生(理科)推薦】

『リボルバー』

原田マハ 著

幻冬舎 刊

ゴッホは本当に拳銃自殺したのか。未だ真相が分からないゴッホの最期。

この本は一丁のリボルバーから始まり、ゴッホの生涯、ゴーギャンとの関係が描かれ、ゴッホが後世に残したものの大きさに気付かされます。アートが好きな人はもちろん、興味がない人も一つの小説として楽しく読めます。



【M・T先生(理科)推薦】

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス 著

早川書房 刊

「人生において大切なことは何だろうか。人間にとっての幸せとは何だろうか。」私が本作品で考えさせられたテーマである。

知的障害者の主人公が手術により知能を高めていく。知能を得たことによる利点欠点により変化していく日常や人間関係が、主人公が書いた日記とともに綴られていく。果たして「知能」を得たことは幸せだったのだろうか。改めて自分の価値観について見つめ直させられる作品である。



【O・R先生(理科科)推薦】

『世界で一番美しい元素図鑑』

セオドア・グレイ 著

創元社 刊

皆さんが化学の授業でならった万物を構成する成分、「元素」。
それらが作り出す物質の美しい姿が、たくさんのフルカラー写真で紹介されている
本作は、全世界120万部、国内25万部のベストセラー。

「日常で見かけるあれに、こんな元素が !!」となるような、解説も盛りだくさん！

まずは、元素たちの作る「美しさ」を、是非ご覧あれ——



【O・R先生(理科)推薦】

『ペンギンが教えてくれた物理のはなし』

渡辺祐基 著

河出書房新社 刊

アホウドリは46日間で地球を一周する。クロマグロは太平洋の端から端まで横断し、また戻ってくる。

……などなど、人間の計り知れない世界を生きる動物たちの体に、記録機器を取り付ける手法「バイオリギング」によって、彼らの驚くべき生態が明らかとなった。

かつて青少年読書感想文コンクール(高等学校の部)の課題図書にもなった本作は、ユーモラスな文章で読みやすく、動物の生態を通し、物理学に触れるきっかけにもなる一冊です。





【I・Y先生(家庭科)推薦】

『変な家』

雨穴 著

飛鳥新社 刊

表紙に描かれていた平面図と、「変な家」というタイトルが気になり読んでみました。その間取りで誰がどの様な生活をしていたのか。話が進んでいく中で、「謎の空間」にて殺人事件が起きていたことが分かり、ゾッとするお話です。平面図から様々な人間模様が分かっていくミステリー小説です。怖いけど面白い。夢中になって読める本です。



【N・A先生(家庭科)推薦】

『あの夏の正解』

早見和真 著

新潮社 刊

実は全国高等学校野球選手権大会、通称『甲子園』が好きな私。題名に惹かれて手に取った1冊です。2020年新型コロナ感染拡大により、甲子園が中止した、“あの夏”の高校球児や監督に密着した内容ですが、高校野球に限らず、あの時中学生だった、高校生だったみなさんのことを考えながら読み進めました。あの夏を経験した全ての人に読んでほしい1冊です。



【W・Y先生(家庭科)推薦】

『「お客様の幸せ」のためにディズニーはまず「おそうじ」を考えた』

安孫子薫 著

小学館 刊

「他人の業務に無関心ではいけない」、「経営者からアルバイトまで同じ価値観を共有する」、「指令系統を明確にする」など多くの名言を残しているこの本のおすすめは人間教育にもあります。試験の点数だけでは人の価値は測れない。何事もハートが大切。自分を大切に、人を大切にする思いやりが幸せを生みだすと教えてくれる内容です。ついうっかり攻撃的な意見を発してしまうすべての方にもおすすめの本です。美観を保つと心もきれいになれるのでは。ぜひ一度は読んでみてください。



【W・Y先生(家庭科)推薦】

『子どもと本』

松岡享子 著

岩波書店 刊

石井桃子先生が杉並に東京こども図書館を設立、以後松岡享子さんはその理事長として活躍し、各書店（ジュンク堂池袋店）等で、朗読会や読み聞かせの会を子どもから年長者まで楽しめる企画も行い、児童文学の翻訳、創作、研究を続けていた。昨年お亡くなりになりましたが、素晴らしい作品は生きています。子どもの本を軽視する大人の方も多いですが、子どもの発育発達に大切な内容が満載されております。保育系や児童教育系に進学の方は愛に満ち溢れた本をぜひ読んでみてください。



【W・Y先生(家庭科)推薦】

『新・大学でなにを学ぶか』

上田紀行 編著

岩波書店 刊

大学ってどんなところ？高校とは全く違うところです。多くの大学がライセンス取得や知識をより定着してくれるところです。それでも学び足りない人は大学院に行きさらに学びます。どんな学びをしたいか迷っている人におすすめです。自分の意思で学びの選択をすることはもちろんですが、個性あふれる人生の先輩に会えるチャンスです。大学でなにを学びたいのか？どう生きると楽しい生活ができるのかがわかる本です。



【M・C先生(家庭科)推薦】

『保育士よちよち日記』

大原綾希子 著

三五館シンシャ 刊

40歳を過ぎてから保育士資格を取得した派遣保育士が、様々な保育園に勤務する中で体験したエピソードが描かれた本です。「保護者には言えない話」「どうしても好きになれない子」など、現在娘を保育園に預けている私にとって、とても気になるワードが目に入り購入しました。将来幼児教育に携わる進路を希望している人、子育てに興味のある人におすすめします。



【M・C先生(家庭科)推薦】

『逆転美人』

藤崎翔 著

双葉社 刊

「ミステリー史上初の伝説級トリックを見破れますか？紙の本でしかできない驚きの仕掛け！」のキャッチコピーに惹かれて一気に読みました。

最後すごい！！と2回驚きました。



【M・C先生(家庭科)推薦】

『君たちはどう生きるか』

吉野源三郎 著

マガジンハウス 刊

以前話題になったので、ほとんどの人が知っていると思いますが、まだ読んだことのない人に読んでもらいたいと思い推薦しました。

大人の私が読んでとても良い内容ですが、特に10代の皆さんに読んでもらいたい本です。



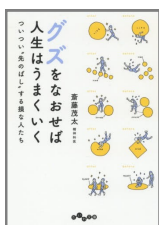
【T・T先生(保健体育科)推薦】

『うまくいっている人の考え方』

ジェリー・ミンチントン 著

ディスカヴァー・トゥエンティワン 刊

自尊心、自信をなくすことは沢山ある。けれど、なんとか生きてきた。周りの人に助けて貰い今の私がいることは確か。人との関わりや自分の性格、家族。自信がなくなることも多くて何度も投げ出したくなった事も沢山あった。そんな時に開く本。気持ちに寄り添ってくれる言葉があったから。



【G・S先生(保健体育科)推薦】

『グズをなおせば人生はうまくいく』

斎藤茂太 著

大和書房 刊

この本は2年前に3年生の担任をしていた時、卒業時にクラスのある生徒が「先生にこの本あげます。学級文庫に置いてください。」と言って残してくれた本です。日々の生活の中で今やればいいとわかっているのに、つい“先のばし”してしまうことがあると思います。そんな先のばしを解消する為のヒントが書かれています。読んで実行してみると、人生の幅と奥行きが広がるはずですよ。



【K・M先生(保健体育科)推薦】

『縁結びカツサンド』

冬森灯 著

ポプラ社 刊

私はいつもお店が舞台となっている物語を読んでいます。その中で縁結びカツサンドという題名でカツサンドと縁結びはなんだろうと思い選びました。この本はパン屋を舞台に、色んなお客さんとの交流を描いた本です。本を読んでいるとドーナツやカレーパン、コロツケなど…たくさんの食べ物が出てきてイメージがとても湧きやすい本です。1つの物語ではなく、4話にまたがっていてそれぞれ主人公が変わっていきます。本を読むのが苦手な私ですが、この本は没頭できどんどん進んで読める本になっています。食べ物が好きな人、本は苦手だけど短編なら読んでみようかなって人ぜひ読んでみてください！



【S・M先生(保健体育科)推薦】

『女ことばと日本語』

中村桃子 著

岩波書店 刊

日本の多くの方言には男女の区別がないのに標準語には「女ことば」という概念があります。絵本や小説などさまざまな本でも話し方で性別を分けるということがされています。ではなぜ女性だけが言葉づかいによって「女らしさ」を表現することを期待されるのか？そんなふとした疑問から見つけた一冊です。



【S・M先生(保健体育科)推薦】

『悲しみの底で猫が教えてくれた大切なこと』

瀧森古都 著

大和書房 刊

奇妙な猫との出会いを通して、登場人物が「生きるとは?」「家族とは?」「働くとは?」など人生を深く哲学していく4つのストーリーで展開していきます。それぞれのストーリーは独立しながらも関連しあい、最終話まで読むと一つの大きな物語として完成されます。読んだ後に本当の幸せに気づく、そんな「気づきのある物語」です。



【H・Y先生(保健体育科)推薦】

『心を整える。』

長谷部誠 著

幻冬舎 刊

元サッカー日本代表の長谷部誠選手が、これまでのサッカー人生を振り返りながら、「心を整える」という独自の考え方に基づいて、56の考え方や生き方を綴っているのがこの一冊です。日頃の読書量を感じさせる文体で、ところどころでユーモアを交えながら深みのある言葉を綴っています。サッカーや人生に対して真摯な接し方をする長谷部誠選手の言葉を一度読んでみてください。



【N・N先生(芸術科音楽)推薦】

『アンと愛情』

坂木司 著

光文社 刊

昨年の推薦図書で「続編の紹介はまた来年」と、約束をしたアンちゃんシリーズの最新刊です。成人を迎え、少しずつ変化する環境の中で、同い年の社員さんとアルバイトの自分を比べて落ち込んだり、常連さんの接客をしたら思いもよらず怒らせてしまったり…。きっと皆さんが共感できる、胸が苦しくなるような経験が、お饅頭のあんこのようにぎゅっと詰まった一冊。一步一步成長していくアンちゃんに勇気を分けてもらえる作品です。



【N・N先生(芸術科音楽)推薦】

『今日のハチミツ、あしたの私』

寺地はるな 著

角川春樹事務所 刊

自分のことを大事にできていますか？コンプレックスがあったり、どうせ自分なんてと思ったり。「あなたがあなた自身のことを嫌っているから。だから周りの人は皆、ますますあなたのことを大事にしないし、嫌いになる。こいつはそういうふうに対してもいいんだって思われてしまう。」優しい気持ちを忘れてしまった時、この本を開いてみてください。蜂蜜をもうひと匙足せば、多分あなたの明日は今日より良くなるから。



【A・A先生(司書)推薦】

『ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」』

ウスビ・サコ 著

世界思想社 刊

マリ共和国の出身で日本国籍を取得し、京都精華大学の学長も務めた著者。日本に30年以上住んでいるのに、日本独特のルールやマナーに、いまだに「なんでやねん」と思うのだそうです。例えば、室内で履くスリッパとトイレのスリッパが別なこと、新幹線でイヤホンの音漏れを注意するのにバカ騒ぎしている人には何も言わないことなど。また、日本のおもてなしが、押しつけになっていることもあるようです。確かに！と考えさせられます。



【A・A先生(司書)推薦】

『広告の会社、作りました』

中村航 著

ポプラ社 刊

将来、就職する時に、会社で働くこともあれば、フリーランスで働くという選択肢もあります。フリーで働くことがイメージできるお話です。

専門学校卒業後に就職した会社が倒産してしまい、次の就職先がなかなか見つからない健一。求人ペーパーで見つけたデザイナー募集に応募し、そこで出会ったフリーランスで活動するコピーライター天津から、クリスマスケーキ販売のチラシ制作を頼まれ、流されるまま仲間として仕事をするようになります。



【A・A先生(司書)推薦】

『笹森くんのスカート』

神戸遥真 著

講談社 刊

本校も今年から制服にスラックスが導入されました。街でスラックス姿の他校の女子生徒を見かけることも多くなりました。でも、男子生徒がスカートを履いている姿は見かけません。この本は、高1の2学期にクラスで人気者の笹森君が突然スカートで登校してきたところから始まります。みんな理由が気になるものの、笹森君に直接聞くことができず、いろいろ詮索します。女子のスラックスは何とも思わないのに、なぜ男子がスカートを履いたら大騒ぎになるのでしょうか？



【A・A先生(司書)推薦】

『答えは市役所の3階に』

辻堂ゆめ 著

光文社 刊

新型コロナウイルス感染症の流行が始まった3年前、突然の休校と緊急事態宣言での外出自粛はみなさんもよく覚えているでしょう。あの頃は不安でしたよね。

この本は、ある市役所に設けられた心の相談室が舞台です。就職難に直面する女子高生、看護師の彼女に婚約破棄された男性、生きることが面倒になった大学生など、コロナが理由で悩みや不安を抱えた人たちが相談に訪れます。カウンセラーの晴川は、その相談者が隠している本当の悩みを探ります。



【A・A先生(司書)推薦】

『遠い空の下、僕らはおそろおそろ声を出す』

野中ともそ 著

光文社 刊

これもコロナ禍の話。一葦(いちい)は、長崎で同じ中学だった女子すぐりと仲違いしたまま親の都合で渡米し、NYの現地の高校に通い始めます。そこで同じアニメを好きなルーツの異なる同級生と友人になり、ひょんなことから4人でアカペラを始めることに。その頃、NYにも新型コロナの感染が拡大し始め、アジア人への差別に一葦の家族も巻き込まれることになります。段々と歌っている場合ではない状況になるものの、4人はある使命から歌うことを止めませんでした。



発行：立川女子高等学校図書館

2023年7月